



1938年1月の天象

星 座 壓倒的な勢ひで星々がその力を競ふ豪華さ、冬の星空が再び我々にめぐつて來た。“オリオン”を中心とする星座の美は秋空の淋しさを癒すに充分以上である。じつとみつめてゐる時の楽しさは夏の銀河の深さに比すべきものがある。杉樹の梢を通して眼に入る“シリウス”の強さには今更ながら驚かされる。

天の西半はこれに比べると甚だ物靜である。廣漠とした“ペガス”の空間には火星と土星の浮んでゐるのが目立つ。

“オリオン”の東に發して曲り曲つて南空低く地に接する“エリダニ河”の星列を辿るのも面白い。

蝕變星アルゴルの極小期は今月は11回を數へるが、そのうち、3日の22時半や26日の21時の時には、極小時の前後數時間にわたつて20—30分間隔で觀測し、光度曲線を書いてみるのも興味のあることである。

太 陽 太陽は未だ北半球の我々には遠い存在である。冬至を過ぎてはや幾日、既に春に向つて進路を轉じた太陽ではあるが、鈍重な地球の感覺はそれに應へるべくあまりにも痺れきつてゐる。北半球の冬は今や深靄の頂點に迫りつつある。

黒點の絶えざる記録のためには緊密な協力を要する。我々は現在20通に及ぼんとする各地からの報告をうけてゐる。しかしその地理的分布はまだまだ完璧の域に達しない。氣象不良による觀測障害を相殺し、わが記録を満たすために、同一状態を示す氣象區毎に三人以上の觀測者を得たい。特に九州、

北海道、朝鮮、臺灣、滿洲國に住まれる愛好家の御協力を切望する。

月. 冬の月の光は痛い。雪を踏んで仰ぐ月は遙か彼方に遠い。木枯しに吹かれて月は堅く凍つてゐる。剃刀のやうに厚さが無い。金屬的な音に齒が痛みさうだ。

今月は、2日と31日と、新月が二回もある。

水 星. 曉星として“射手”座西部にあり、上旬に逆行し、10日に停留し、以後順行に移る。光は2等より0等に増し、觀望に適す。

金 星. 曉星として“射手”座を順行中。ますます太陽に近づき觀にくい。

火 星. “水瓶”“魚”座を順行中。光度1等弱であるが、土星とともに淋しい西空を賑してゐる。もはや觀測の對象ではない。

木 星. “やぎ”座を順行してゐるが月末には太陽に追ひ越される。觀測には不適當。

土 星. 相變らず“魚”座にあつて、春分點を指示してゐる。光度1等。當分は觀測の好機にある。

天王星. “ひつじ”座を逆行し、18日以後順行となる。觀測によい時機である。

海王星. “しし”座東南部を逆行中。夜半頃に東に現れる。一般愛好家には時機尙早である。

冥王星. “かに”座西部を逆行中で、良い位置にあるのだが、専門家でも特別な人以外には見たことのある人は極く少い星であるから、拱手の外はない。

エンケ彗星. この12月29日に近日點を通過するが、光度は6級前後。見える位置は“蛇遣ひ”座で、太陽に近い夕暮れの天である。

流 星. 新春の曉をかざる四分儀座流星群がある。“龍”座の星附近を輻射點とし、12月末より約10日間出現するが2—4日頃に最も見事に見える。月末には“牧夫”座の北部を輻射點とする小さい流星群が現はれる。冬の流星觀測は寒さが身にこたへてなかなか忍耐を要する。殊に夜半より曉にかけては全身が石の様に冷かたまつてしまふ。内に燃ゆる熱い愛好心がなければ到底たへられぬことである。星を愛するが故に全てを忘れてひたすら努力する觀測家の前にはたゞ頭がさがるのみである。